

## 『高知県越知町谷ノ内地すべりの発達史』

大路 一明

谷ノ内地すべりは、北部秩父帯にある地すべりで、構成する岩石はへき開の発達した泥質岩と砂岩の互層からなるが、移動体の右半分には硬質の塊状岩盤であるチャート層が分布する。NE-SW方向にのびる尾根の南東側には比高 60m・長さ 1,500m の滑落崖があり、地すべり頭部の尾根とで二重山稜を形成し、その間が線状凹地になる。現在は、地すべりブロック C が頭部の二重山稜を作った初生の地すべりから分かれて移動し、地すべりブロック B と C の間には滑落斜面がある。

谷ノ内地すべりの地質構造は、走向 NE~EW 方向・傾斜 0~30° S に傾斜する流れ盤と、ブロック B 右端・ブロック C のほぼ中央を通る東西方向の向斜軸が特徴である。すべり面は、チャート層の下位にある砂岩・泥質岩互層中にはさまる緑色岩層の中に形成される。末端部において、緑色岩層が谷の侵食によって露出した時に、初生の地すべりが活動する。

初生地すべりの移動は、二重山稜の地形の対応から東南東~東方向におよそ 150m になり、向斜構造が移動方向を規制する。二重山稜が明瞭に認められる範囲の移動体が大規模に活動し、山頂から南側の地すべりブロックは、引きずられるように動く。左側方部を尾根に規制された移動体は、谷ノ内川を押し出して変形させ、東南東~南東方向に動きを変える。右側方部を規制する尾根に移動体は乗り上げて、移動体自体が重しの役割を果たし、動きはひとまず止まる。移動体末端部では谷ノ内川による侵食は続いており、すべり面を切ると、移動体は再度不安定になり、2本の尾根の間を縫うように地すべりブロック C が分かれて動く。移動体末端部付近は、谷ノ内川・向斜軸上の谷・東側の谷ノ内集落からの谷の 3 本が合流する地点であったため、2本の尾根の間には地すべりブロック C の移動に十分な余地があった。地すべりブロック C が移動する際、初生地すべりからの境界となったのは、チャートと砂岩・泥質岩互層の境界である。チャートの硬質な岩石特性と地表面の分布が、地すべりブロック C の規模を規制する。押出された谷ノ内川の屈曲から、地すべりブロック C の移動は東向きにおよそ 150m で、東西方向の向斜構造が移動方向を規制する。

現在最も活動的である地すべりブロック C は、まだ動く先に余地がある上、谷ノ内川の侵食は続くので、今後も動き続ける。地すべりブロック A・B は、地すべりブロック C の移動にともなう余地ができるため、地すべりブロック C の動きにともなう活動する。地すべりブロック C の動きが、現在の谷ノ内地すべり全体の動きを支配する。